470　^{99m}Tc-GSA肝シンチグラフィによる肝機能評価—多変量解析による核医学指標群と血液生化学指標群の検討—

鈴木康徳，水田昭文（中国中央放）新谷直道，向井　敬，中川富夫，河野良寛（国立福山放）平木祥夫（岡大放）

^{99m}Tc-GSA肝シンチによる肝機能指標群と血液生化学検査群との相関につき正準相関分析を用い検討を行った。

対象は国立福山病院にてTAEを施行した肝細胞癌48例で，LHL 15,HH 15,LU 15を核医学指標群とした。また血液生化学検査群としてT.Bil,Alb,Ch-E,ICGR$_{15}$,KICGを用いた。解析にはStat View及びHALBAUを用いた。両群の正準相関分析では正準相関係数が0.7105と有意な相関を示した。血液生化学検査群の中ではCh-E，ICGR$_{15}$，KICGが核医学指標と強い関連を持つことが示された。これまで2変量で論じられてきたことが多変量解析でもほぼ同様の知見を得ることが出来た。

471　重症肝炎に対する ^{99m}Tc-GSA 肝シンチグラフィの意義－とくに劇症肝炎診断の有用性について－

内山勝弘，國安芳夫，長谷部　伸，新尾泰男，篠原広行，松岡　伸，島　英樹，大渕真男，滝沢謙治，本田　実（昭和大学藤が丘病院放）

重症肝炎(SH)と劇症肝炎(FA)の鑑別は、治療法の選択など臨床上重要である。今回、FH8 例、SA17 例での ^{99m}Tc-GSA 肝シンチグラフィの所見を比較検討した。血漿クリアランス指標である HH15 は FH 群では 0.85±0.03 で SH 群の 0.73±0.11 に比べ有意(p< 0.01)に高かった。肝集積指標である LHL15，LU3，LU15，LB ratio（肝・全身カウント比）は、FH 群で 0.71±0.08，6.1±2.2，8.9±3.8，0.17±0.07，SH 群の 0.84±0.09，11.9±3.5，18.9±6.4，0.41±0.13 に比べいずれも有意(p< 0.01)に低かった。^{99m}Tc-GSA 肝シンチグラフィは重症肝炎劇症化診断、予後判定に有用である。

472　Tc-99m GSA SPECTによるTAE前後の肝機能評価

加藤弘毅，佐久間郁郎，　泉 純一、戸村則昭，渡会二郎(秋田大 放)，佐々木一文，田村清彦(同 中放)

選択的肝動脈塞栓術(TAE)を行った8例の肝細胞癌 に対し,TAEの1週前後にGSA-SPECTを用い,全肝,塞栓部,非塞栓部に分け評価した。全肝についてはHH15とLHL15を指標とした。塞栓部と非塞栓部については,全投与放射能に対するカウント比(塞栓部: Re, 非塞栓部:Rn)を算出し,TAE前後の変化を検討した。塞栓部の同定はTAE後2週間目に施行されたCTを参考にした。全肝では,TAE後にHH15が低下する傾向がみられたが,LHL15は一定の傾向を示さなかった。また,RnはTAE後増加するものが多くみられ,これまでの報告にもみられるように血中HGFの変動との関連が考えられた.

473　脾動脈塞栓術後の^{99m}Ｔｃ-ＧＳＡの検討

河　相吉，池田耕士，甲田勝康，田中敬正(関西医大放)

脾機能亢進に対する部分的脾動脈塞栓術（ＰＳＥ）による肝への影響は肝と脾の臓器相関の観点から興味深い。ＰＳＥ前後での脾と肝の関連性につき検討した。対象は脾機能亢進を伴う肝硬変症17例である。ＰＳＥ３，30日後に^{99m}Ｔｃ-ＧＳＡ肝シンチグラフィ，超音波ドップラー法を行い，Human hepatocyte growth factor(ＨＧＦ)，Transforming growth factor-β1（ＴＧＦ-β1）を経時的に測定した。ＰＳＥ後のＧＳＡは３日後は良好化，30日後に前値に復した。脾静脈血流は有意に低下した。ＨＧＦはＰＳＥ１日158±68%と早期に上昇した。ＴＧＦ-β1は３日140±77%，14日193±47%と遅れて上昇した。ＰＳＥにより脾静脈，門脈血流は減少，早期にＨＧＦが増加し，これとＧＳＡは対応し，後期はＴＧＦ-β1の作用により受容体活性が抑制されることが示唆された。

474　肝細胞癌患者における ^{99m}Tc-GSA による肝機能評価の意義

長谷川義尚，　野口敦司，橋詰輝巳，井深啓次郎，若杉茂俊（大阪府立成人病センター　RI 科），松永　隆，井上敦雄（同消化器内科）

瀰漫性肝疾患(DLD)および肝細胞癌(HCC)患者を対象に、^{99m}Tc-GSA 肝機能指標の LU15 に肝の形態、体型による吸収補正を施した指標 LU15VW、心臓部放射能曲線の２相指数関数近似式より求めた血中消失率 D15 の両者を用いて肝機能評価を行い、従来より用いられている ^{99m}Tc-GSA 肝機能指標、他種肝機能検査との比較を行った。DLD 群の LU15VW,D15,LHL15,HH15 と ICG、血清 Albumin,platelets,PT との相関は LU15VW,D15 が良好であった。HCC 群の各指標と ICG の相関は著しく低下したが、Alb,plts,PT との相関では D15 が最も安定し、HCC 患者の肝機能評価に有用と考えられた。

475　99mTc-GSA SPECTを用いた肝腫瘍の質的診断

斎藤和博，小泉潔，石井巌，柿崎大，阿部公彦（東京医大，放），後藤康之（武蔵野赤十字，放），関知之，新戸禎哲（東京医大，内）

GSA SPECTにおける検出例の，組織学的所見，MRIのT2WI所見との比較検討を行った．対象は，組織学的に確認された29症例29結節である．18結節が検出可能で，hot spotを呈した3結節は高分化型肝細胞癌 (HCC) 2結節，線維化結節1結節で，これらは，全てMRIのT2WIで低信号を呈した．cold spotを呈した15結節は高分化型HCC 3結節，中分化型HCC 2結節，転移性肝癌 4結節，胆管細胞癌 2結節，カルチノイド2結節，submassive necrosis (SM), 血管筋脂肪腫各1結節で，これらはSMを除き，全てT2WIで高信号を呈した．GSA SPECTの肝腫瘍の質的診断に対する有用性が示唆され，hot spotを呈する結節は高分化型HCCの可能性が高い事が予想された．

Presented by Medical*Online